

## 活動報告

## 大学における活動と地域の人々

## 最近私が関わった人たち

別府大学短期大学部 地域総合科学科  
准教授 梶原 博

筆者は、短大の地域総合科学科に所属し、これまで学外の多くの人々と出会い、学科の活動のお手伝いをしていただいた。そうした出会いの中で、ここ数年の事例をいくつか取り上げ紹介する中で、筆者の活動、ひいては、所属する学科の状況を紹介したい。

## 1 豊後高田市グリーンツーリズム協議会

田中友昭さんは、豊後高田市グリーンツーリズム推進協議会の事務局にいて、今年度(2009年度)の後期に、本学科の留学生の学外学習プログラムをほぼ一手に引き受けてもらった。

提供していただいたプログラムは、豊後高田市における農業体験(ネギ、レンコンの収穫)や伝統文化体験(座禅、和太鼓)であったが、もともとは、安心院グリーンツーリズム(<http://www.3.coara.or.jp/~ajimu/>)で仕事をしていた人であり、その関係から知り合った。

筆者は2006年から安心院のグリーンツーリズムの農泊体験に学生を参加させてきた。安心院のグリーンツーリズムは全国のグリーンツーリズム(農泊体験)として先進的な試みであり、実際に体験してその良さを実感した。学生も、「今までの学外実習の中で一番楽しかった」と好評だった。

ただ、貧乏な学生を連れていく身としては料金的にやや苦しく、また、宿泊以外の事務的な運用面については、やや理念先行といった感がなかった。

ところが、2008年に、「今年が最後の利用になるかもしれないな」と思いつつ事務局と打ち合わせを始めたところ、これまでとはまったく雰囲気

が変わっていた。

まず、大学まで打ち合わせのために来ていただいた。筆者はもともとフットワークが軽い方だし、現場を見ること自体が好きなので、打ち合わせに向くことは何でもないのだが、3年目ともなると当初の熱気もやや冷めてしまっているし、だいたい、事務局はかなり寒いので、秋冬の訪問はちょっと嫌なのである。

それが、電話で話をすると、すぐにこちらに来てくれるという。まるで普通の旅行社の営業マンである。

来ていただいて、さらに驚きは続く。何と、料金が安くなっている。普通の宿泊に比べある種の「割高感」を感じながらも、今までは「地域に貢献する」ための費用だと自分に言い聞かせていたのだが、きわめてリーズナブルな料金になっている。しかも、料金見積もりや日程表まで持参である。

普通の旅行なら当たり前のことだが、「グリーンツーリズムだから」と思って切り捨てられていたサービスが、普通に行われたのだ。

この営業?さんが田中さんである。聞けば、普通の企業の出身で、公募で事務局に勤めるようになったそうである。筆者が(少し)不満に思っていたことが、農泊が軌道に乗るにつれ内部でも見直しされるようになったのらしい。

筆者が地域活動にかかわる人たちとのお付き合いをするようになって、その付き合いが長く続くとき、しばしば、その人が、「たたきあげ」の地域の「活動家」ではなく、商社などの企業経験者であることが多い。今回の田中さんも、そのような一人になりそうである。

実は、今年は安心院での農泊はしていない。好き嫌いのせいではなく、授業科目の年間計画配置の関係である（農泊は、これまで必修科目授業として行ってきたのだ）。そのかわり、豊後高田市の田染庄で収穫祭（稲刈り）に参加した。（この日の様子は、[http://www.city.bungotakada.oita.jp/dekigoto/tasibunosyou\\_syuukakusai\\_20091011.jsp](http://www.city.bungotakada.oita.jp/dekigoto/tasibunosyou_syuukakusai_20091011.jsp)を参照）。このときに、声をかけてきたのが、何と田中さんだった。

安心院のグリーンツーリズム田中さんは、豊後高田市グリーンツーリズム協議会に移籍していたのである。

豊後高田市を拠点に新しい観光プログラム作り携わっているという。学外体験授業のネタ探しの話をする、国宝富貴寺の座禅体験などを企画しているという。さっそく、「営業」に来てもらうことでその日は別れた。

### 豊後高田市での体験学習 その後

結局、田中さんの提案で10月から12月の2カ月に3本の体験学習プログラムを実施することができた。ネギとレンコンの収穫体験、座禅と和太鼓の伝統文化体験、ソバ打ちと茶立ての体験である。

それぞれ、今、どこでも行われているごく普通の地域体験学習である。しかし、豊後高田市でのこうした体験には、いろいろなことを考えることができた。

すべてのプログラムには、豊後高田市の職員が2名ついて、世話をしてもらった。

市が用意している体験プログラムはかなり整備されているが（参照：<http://www2.city.bungotakada.oita.jp/kankou/root/index.html> 豊後高田市観光協会）、今回お世話になった、ネギとレンコンの収穫体験は、始めたばかりだという。いっしょに回りながら、「せっかく収穫したものを食べずに、お弁当の昼ごはんとはさびしい。野外で野菜のてんぷら作りをセットにしたらどうだろうか」などなど、3人であーでもない、こーでもない、と企画を練りまわす。できた（でっちあげた）企画を「では先生、次はこの企画を使わせてもら

います」と言われると、素直にうれしい。

地域社会研究センターを立ち上げるとき、「学生は、地域おこしの資源になる」と宣言したが、学生と一緒に地域作りに参加する充実感をひさしぶりに感じられた。

田中さんと、もう一人の若手職員である安藤さんは、私たちといっしょに動きながら、「あ、この〇〇は使えそうだな」とか「この〇〇を活かすために、今度△△さんに電話をしよう」とか、いつもいつも企画について話している。安藤さんは、見るからに地元の若者であり、田中さんとは趣の違うタイプだが、彼らは、企画作りを本当に一生懸命、そして楽しみながらやっている。

10年前に、公開講座で「昭和の町」を推進した豊後高田市の市長をお呼びした。そのとき、講座の目的や聞きたいことなどについて、観光課の若い職員と打ち合わせをしたのだが、観光にかかわる職員の意識の変化について熱く語る姿が印象的であった。今回、田中さんと安藤さんと3回にわたって同行して、豊後高田市のこのような流れがより大きなものになっていることを知ったことも今回の関わりで得られたことだった。

それと同時に、地域における人材確保という点でも、興味深い事例であると感じた。

### 新しく地域を支える人

田中さんは公募でトラバークした人であると言ったが、田中さんの経験は、安心院の農泊事業展開に大きなプラスとなっていたはずである。その田中さんが、豊後高田市に移籍したのは、必ずしも本人の希望ではなかろう。地域おこしという理念を現実にするためには、さまざまなバランス感覚、いいかえれば事業感覚が必要だ。このような感覚の持ち主を、地域だけで発掘することは大変であり、田中さんの移動は、おそらく、引き抜きだったのだろう。

地域おこし事業が質量とも広がっていく中で、優秀な人材確保は、地域間の競争を激化させるだろう。本来、地域おこしは、人材の発掘・育成とセットになっているはずだが、なかなかそうはいかないからだ。とりわけ、合併後の「田舎」にお



いて、人材確保の問題は、複雑な様相を呈していると思われる。

「自分の村を守るために、自分たちが始めた」プロジェクトが合併後に勢いがなくなることを嘆く自治体職員にも出会ってきた。単に予算面で苦しくなって、縮小させられるというだけでない。むしろ、合併後の他地域に「流用」されることの方がこたえるのではないか。

地域に根差し、地域の特性を生かしたはずの地域おこし事業が、発生地域を超えた地域事業になり、そして、商品性を問われていく。この中で、どのように人材確保を行うかという問題が、田中さんのケースに表れていると感じた。

## ② まちづくりコンサルネット

以前、別府大学短期大学部大分キャンパスで、NPOをテーマとした公開講座を行った。このときのご縁で知り合ったのが、裕尾さんである。後述する関さんから紹介していただいた。

日本でNPOという言葉が使われるとき、ボランティアという言葉の場合と同様、ある種の胡散臭さがつきまとう。それは、これらの言葉に、極端に言えば「滅私奉公」のイメージがかぶさってくるからだ。地域社会研究センターでは、これまで多くのNPO関係の人たちと接してきたが、おおよそみな、このようなイメージとは無縁の人ばかりであったのは、滅私奉公型の活動が続かな

い、広がらないという基本コンセプトがわれわれにあって、できるだけそうしたコンセプトを体現していそうな人を探していたからだ。

われわれが公開講座を行ったころは、行政が積極的にNPOの育成にかかわり始めたときであり、公開講座のテーマにNPOを取り上げた理由も、自分たちなりのNPOの理解を深めたいと思っていたころでもあった。従来のNPO観で、特に気になっていたのが、「NPOで儲かってはいけない」という考え方だったため、コミュニティビジネスというキーワードは非常に新鮮に思えた。

### 専門は建築屋

裕尾さんは、専門が建築であり、もともと佐藤ベネックに勤務していた。仕事の関係で都市開発に興味をもたれたのか、独立して、2002年に株式会社まちづくりコンサルネットを設立、当初より、大分県におけるコミュニティビジネスの専門家として有名であった。

最初にオフィスに行ったときに面白いと思ったのは、「壊すことを考えた建築」の話だった。大手建設会社で大規模建築物にかかわってきた中で思いついたことだそうである。

地域社会研究センター的にいえば、町づくり、景観というキーワードの連鎖の中で、いつか建築屋さんとおつきあいたいものだと思っていたのだが、実際の出会ってみて専門家ならではの発想が新鮮だった。

## 学生という資源

裕尾さんとは、公開講座のとき以来、思い出したようにお会いし続けているが、会うたびに「先生、先生の周りにはいる学生さんや卒業生は、本当にすごい宝ですよ」と言う。

裕尾さんはビジネスの視点でものを考えるので、学生も、マーケティングという観点からみる。彼に言わせれば、街頭でアンケート調査をするその辺の学生と、私の周りにはいる学生は、ビジネス的にまったく異なるというのだ。簡単に言ってしまうと、そこから出てくるデータの信頼度が違う。さらに、継続的な接触ができるので、データを集めた後の企画の展開の点でも圧倒的に有利だというのだ。どんなに多くの人間から集めたデータよりも、人間関係で結び付いた少数のデータの方が役に立つ、というのが裕尾さんの話であった。

大学のような教育機関が入ることで、若者と社会とが、有機的に結び付くということだが、同じような発想で、裕尾さんはアルバイトの重要性も強調していた。

お会いした当時は、大学におけるインターンシップについて、その重要性が指摘され始めていたところだった。その一方、「アルバイトとインターンシップは違う、アルバイトは（いろいろな意味で）一段劣る」という考え方も根強かった。

裕尾さんは、こうした当時の認識を批判して、「先生、私に学生さんを預けてくれませんか。接客ということについて、みっちりしごいてアルバイト先に送ったら、先方は、『別府大学の学生さんはすごい』という評判になりますよ。そうすると、単にアルバイト先が確保できるだけでなく、インターンシップの評価を始め、普通のアルバイト先では頼めないような深い関係もできるし、何より学生たちが『自分たちは、普通のアルバイト以上のことを学んでいる』という自信をもちますよ」と話していた。

ジョイフルにアルバイトしていた学生に、エクセルを使った簡単な経営シミュレーションのやり方を教えた経験のある私にとって、裕尾さんの提案した、学校教育とアルバイトを有機的に結び付

けるという話は非常に魅力的であったが、残念ながら、いまだに実現していない。

インターンシップは、今や多くの大学で、独自性を打ち出すときの目玉商品となっているが、きちんとした事前・事後指導を行わないと、単なる社会見学に終わってしまう。筆者が所属する学科でも、企業の人事担当者を巻き込んだインターンシップ後のプレゼンテーションが提案されているが、学科にそこまでの機動力がないのが現状である。ぜひ裕尾さんに、面白いインターンシップ事業をプロデュースしてもらいたものだ。

## ③ 旧彩演素研究所（サイエンスラボ）

裕尾さんと同様、NPOをテーマにした公開講座がご縁である。県庁に行って、「NPOで公開講座をやりたいんですが」と持ちかけたところ、NPOを立ち上げるNPOの専門家として、「うちよりも、この人を」と紹介された。もともとは、高齢者・障害者などと関わるNPO活動が専門だった。

最初にお会いした時から、「金勘定のことをしっかり押さえているな」と思い職歴を聞くと、バリバリの広告マンだったそうだ。この世界に入ったきっかけは阪神淡路大震災。それ以来NPO漬けの人生となってしまい、人ごとながら、ご自身の家族との関係を心配してしまう。

関さんからは、「縁あるみなさまへ」で始まる関係者送付のメールが年に数回送られてくる。思い出したように返事を書き、NPOや地域からみで何か困ったときには電話をかけるという関係である。

もともと福祉関係のNPOからこの世界に入り、今一番力を入れているのは、さくら親児会という「障がい児の親とサポートの集まり」（<http://sakuraoyajikai.junglekouen.com/>参照）だそうだが、やはり、私にとっては、NPOの生き字引である。

一昨年も、「GPSの活用+災害時の緊急対応」というキーワードで、誰か面白い人を紹介してくれないか」という問い合わせに対して、大分県ボラ



ンティア市民活動センター（大分県災害ボランティアネットワーク）の村野さんという方をさらっと紹介してもらった。

ビジネスマンとしての金銭感覚と、阪神大震災がきっかけというメンタリティの同居の仕方がかなり特異なキャラクターの方で、このページで紹介しようとしたものの、うまくまとめられない。そこで、彼らしさが端的に出ている話を紹介したい。

彼が主催していた彩演素研究所（サイエンスラボ）は、2008年に認可を取り消された。このときの経緯はメールで配信された。

「縁あるみなさまへ」で始まるメールには、取り消し処分の理由が、事業報告3年間未提出であること。なぜ、処分という外見の悪い結果になったかということ、普通に解散しようとする、「公示目的で9万円を納付しなければならない規則」があるため、「脆弱な法人にとっては負担不可能と判断し、確信犯的な認証の取り消しを選択した」ということだった。

メールは、次のように続く。

「言い訳になりますが……」

地域にある問題を地域で解決するために活動する中、行政の補助や助成をあてにすると煩雑な作業が伴います。余計な人材が必要となります。

そのような中で、余計な作業に翻弄されるよりも、本来の目的である問題解決に直接的に関わる方法として、行政の足かせ的法人格を継続するよりも任意の団体として機動力ある活動をした方が効率的であると判断したことも大きな要因のひとつでもあります。」

短い文面ながら、NPOの抱える課題の一端がよく伝わってくると思う。

前述したように、関さんが今一番力を入れているのは、「さくら親児会」で、昨年5月、私も大在の活動拠点を訪問した。ここでは、障害者やその関係者が、地元の農家と提携して、農作業を通じた交流活動を行っている。ホームページ（ブログ）のプロフィールには、

さまざまな障がいに伴う苦難や偏見、垣根や差別という悲壮感はポケットに仕舞い「明るく♪ 楽しく♪ 面白く♪」をモットーに、やさしい気持ちと遊び心を持ち寄り、いつでもどこでも誰とでも、という自由な活動をはじめました。この指と〜まれ♪

とある。さすがに農作業までは手伝えなかったが、相変わらず、彼の周りにはいろいろな人の輪が繋がっていた。

スリランカからの留学生のスッチータ君は、本学別府大学の留学生であり、近くの喫茶店でスリランカカレーをごちそうになった。今は、別府市内にも店を展開しているそうである。

またこの日は「幼稚園に芝生を！」という先生にも出会った。今、市から補助金をもらうべく、いろいろと動き回っているそうである。テストケースとなる幼稚園を探しているということで、とりあえず、別府大学の附属幼稚園や人間関係学科のことを紹介したが、その後、どうなつてであろうか。



いずれにせよ、地域連携で困ったことがあったら、これからも関さんに電話をかけることになるのだろう。

#### 4 おわりに 地域は大学が好き

ここ数年、筆者は地域とのつながりが著しく薄れてきた。そんな中で、最近出会った人たちを紹介することで、もう一度、様々な意味での原点に立ち返ろうと思ったのが、今回の原稿である。

とりわけ付き合いの深い、長い方のみを取り上げたが、これ以外にも、わずかずつではあるが、新しい付き合いの人たちも生まれつつある。

池田さんは、東京アカデミーの看板教師である。大分で仕事がしたいのだが、食っていけないとのことで、大分と東京を行き来する生活を送っている。

もともと、2008年度、就職試験対策の講師として非常勤で講義をしてもらったのがおつきあいの縁である。お会いしたら意気投合して、本当は大分のためになるような仕事がしたいのだと話すので、コミュニティビジネスや裕尾さんの話をしたら、非常に興味をもたれ、ぜひ本学の学生とともに、地域に展開したビジネスを立ち上げたいものだと伝えてくれている。

向野さんは院内の方である。学生を引率して石橋を見学する縁で、同僚の先生が知り合った。先日「田んぼが1枚あいてしまうのだが、休耕田にするのはもったいない。何とか別府大学の学生さんと連携して、残せないだろうか」という相談があった。

向野の住まわれている院内の隣には、この原稿でも触れた田染庄があり、「中世の風景」をキャッチフレーズに魅かれて、多くの人がやってくる。そのような状況の中で、たった一枚の田んぼを別府大学の学生に提供しようとおっしゃってくれる。率直に言って、ほんの2、3回農作業するくらいで、何かを得ようというのは双方にとって虫のよい話だ。田染庄や安心院のグリーンツーリズムが成功しているのは、様々な付加価値があるか

らだ。その意味では、今回の提案は、残念ながら受け入れることは難しい。古くから石橋の町として有名で、それなりの観光客がいるにもかかわらず、今回のような提案があった背景としては、石橋だけに頼った地域おこしに飽きたらないという側面と、周りの新しい成功を見てのあせりもあるのではないか。

前述したように、地域おこしは、非常に激しい競争局面になっている。それに加えて、先年の大合併である。今まで、自治体が異なるので存続できていた企画が、同一行自治体内で優先順位をつけられるようになったのだ。関係者のあせりは想像に難くない。このたび地区の地域おこし推進協議会が発足したという向野さんの思いにどう応えるか、現在思案中である。

それにしても、地域の人たちは、大学に夢をもってくれている。ほんの少しのかかわりから、いろいろな相談を持ち込む。

先ほどの池田さん以外にも、理科ばなれのご時世で楽しい理科の授業をさせてくれないかと言っていた先生や、留学生が少しでも地域になじめるよう、お茶の先生をしましょうかと言ってくださる先生など、大学にやってくる人、期待している人たちの数は非常に多い。

こうした人たちの何ができるか考えながら、もう少しがんばってみたいと思っている。